近代日本における国民高等学校運動の系譜（六）

Ⅳ　加　藤　完　治（下）

——国民高等学校運動から満洲移民運動へ——

宇　　野　　豪

（受付　2000年4月10日）

は　じ　め　に

加藤完治がわが国における国民高等学校運動の指導者となった直接のきっかけは，図らずも彼が恩師矢作栄蔵らの推薦によって山形県立自治講習所長に就任したことにある。彼はここで同講習所設立の任にあった同県地方課長・藤井　武の「自治講習所設置ノ議」の重要な「範例」となっていたデンマーク国民高等学校運動に否応なく触れることとなったのである。しかし彼は，藤井の設計をそのまま受容し実践したのではなく，当時彼の師事していた筧　克彦博士の古神道の信仰を心の支えとしつつ，講習生との文字通り子弟共働の日々の実践を通じ，十年の苦闘のなかで彼独特の農民教育の理念いわゆる「理想信仰」と，その実践形態即ち「実修の形式」を確立したのであった。それがやがて彼の日本国民高等学校教育およびその運動の指導理念となり，実践の基盤となったのである。彼が如何なる経緯によって自治講習所長を辞し，農務官僚・石黒忠篤らの協力のもとに，茨城県友部に日本国民高等学校を創設，その校長に就任し，名実ともに「日本の」国民高等学校運動を展開することになったか，については前稿において見てきたところである。

本稿においては，先ず加藤によって開校された日本国民高等学校がその後どのような経過を辿ったか，そこに農民教育指導者でありかつ学校経営者である校長加藤完治の如何なる情熱と創意とそして努力が払われたのか，を中心に資料に基づいて考察したい。次いで，この学校および校長加藤の

実践や運動がわが国内にどのような影響を及ぼしたか，その実態を可能な限りにおいて把握したいと考えている。そして第三に，加藤完治および日本国民高等学校の教育と運動の歴史的・社会的性格の批判的検討をしなければならない。そこではおのずから近代日本と現代日本という歴史的背景の変化に伴う，歴史認識の価値観の相違にかかわる重要かつ困難な問題に出会うことになるであろう。それは筆者にとっての試練であり，避けることのできない課題である。

なお，最後に，日本の近代において生成展開されたこの国民高等学校運動なるものが，何故にかかる運命を辿ることになったのか，その問題についても総括を試みる必要があると考えている。

2.　日本国民高等学校運動の展開

(1)　日本国民高等学校開校直後の諸問題と対応

友部に開校された日本国民高等学校の経営・教育及び運動は，加藤完治にとって山形自治講習所における実践の延長線上にあるものといっても間違いではなかろう。しかしながら組織形態も，またその規模も，そして何よりも対象とする生徒の年齢とその集団構成において，自治講習所とはかなりの違いがある。したがってそのような変化に対応する必要がおのずから生じるであろう。この開校の年（1927）の12月に彼が『弥栄』に発表した「日本国民高等学校開校第一年の感想と明年度に対する意見』[1] にもその間の事情が窺えるのである。この記事は，まず「(一) 生徒の募集について」に始まり，「(十) 来年の生徒募集条件」をもって終っているのみでなく，その内容の大部分が応募者ないし入学者に対して同校の教育理念や教育方法の理解を深めること，そしてしっかりした覚悟をもって応募すること，を説得することを中心に書かれたものであるが，しかし同時に，学校運営及び教育指導の改善に関しても若干の計画を示している。それらを要

1)　加藤完治全集第四巻『加藤先生　人・思想・信仰（上巻）』，140頁。

約し列挙すれば

(一) 1年のうち1月と2月を休暇期間とし，これを職員の修養と農場経営の設計などにあてる期間とすること。(これは1年の経験で職員の修養の必要を痛感したからだと，加藤は述懐している)

(二) 3月を入学者選択のための短期講習期間にあてる。(農業労働を主とする1か月間の講習を通じて，応募者のなかから入学後1年間でこの学校の目指す人間に仕上げ得る見込みのある者のみを選んで入学させるため)

(三) 入学は4月とし，授業期間は11月までとする。そして12月は旅行期間とする。

(四) 短期講習以後入学を認められた生徒は講習期間を含め10か月間を在校期間とし，夏休みは置かないこととする。

以上の決定は翌年即ち開校第二年目1928（昭和3）年から実施されることとなるのである。このように定めたことに関して彼は「自分は我が農村青年子弟の教養についても，既に十年の経験を有しており，デンマークの国民高等学校についても，相当深い理解があるから，たとえ倉卒に事業を始めたために準備が不足でも，余りくいちがいが生ずることはなかろうという自信をもっているが，今後ますます熟慮に熟慮を重ねて，日本の国民高等学校運動を大成したいと念願している」[2] と自信の程を示すとともに，今後に向けての固い決意を表明している。そこで彼の自信・決意とともに注目されるのは，彼が自らの実践を「日本の国民高等学校運動」として自覚し表明していることである。彼は単に友部の一国民高等学校長として農村青年教育に従事していたのではなく，日本全国の農村青年教育のモデルとなり，またその改革・発展の牽引力となって国民高等学校運動を展開しようという意図と決意がそこにあったのではなかろうか。

2) 同書，151頁。

(2)　日本国民高等学校における初期の運動展開

第二年次には前記の改革とともに，生徒編成の第四部即ち女子部の第一回生が 9 月に入校し，修学期間は 3 か月と定められた。さらに翌1929（昭和 4 ）年 4 月には第三部（少年部）第一回生が入校し，2 か年制がスタートすることとなった[3)]。こうして生徒編成組織は最初の計画を達成したのである。そして同時に修学期間についても一応の決定をみることとなった。また生徒募集及び入学者選抜についてもほぼルールが定着したようである。なお「短期講習」をいわば「仮入学期間」として入学者選抜の観察期間にも活用したことは，如何に加藤が素材としての人材を重視したかを窺わせるものである。

慌ただしく発足した日本国民高等学校であったが，第三年次を迎えた段階で一応組織を完成し，逐次その卒業生を世に送ることとなった。その状況を次の表によって見ることができる。

卒　業　生　一　覧

	第一年度	第二年度	第三年度	第四年度	第五年度	第六年度
第 一 部	25	46	39	47	55	41
第 二 部	18	18	22	32	18	27
第 三 部			5	6	11	9
第 四 部		10	14	6	11	12
計	43	74	※70	91	95	89
自家経営	36	60	60	84	79	80
移 民 地	4	8	4	6	4	1
そ の 他		6	6	1	12	8

（加藤完治著『日本農村教育』・昭和九年。但し昭和16年75版により作成）
※この年度各部卒業生数の合計は80名となる。疑問があるがそのまま掲載。

なお，これら生徒たちは全国のどの地域から入校してきたのか，そして卒業後どのような地域において活動しているのだろうか。さきに紹介した

3)　日本国民高等学校協会編『写真で見る60年の歩み』昭和62年，251頁。

「卒業生一覧」に付けられた「分布状況」は，第六年度までの卒業生の分布状況をまとめて各都道府県別並びに朝鮮，満洲，台湾の別に数字にしたものである。それは卒業生の活動地域を知るために有効であるのはいうまでもないが，同時に出身都道府県を知る上でも有効である。そしてさらに，日本国民高等学校への関心と理解の広がりを示唆するものと見ることができる。

卒業生の地域的分布状況

茨城	100	秋田	12	神奈川	4	福井	3	宮崎	1
長野	39	岐阜	11	宮城	4	愛媛	3	高知	1
群馬	31	埼玉	8	青森	4	鹿児島	3	島根	1
山形	23	千葉	8	兵庫	4	滋賀	3	大阪	1
和歌山	20	静岡	8	石川	4	岩手	2		
福島	16	岡山	7	京都	4	富山	2	朝鮮	18
山口	15	香川	7	鳥取	4	福岡	2	満洲	10
東京	14	山梨	5	長崎	4	佐賀	1	台湾	9
栃木	14	広島	5	北海道	4	熊本	1		
愛知	13	新潟	5	三重	3	大分	1	計	462

出典：前表に同じ。（前表同様第一回から六回までの卒業生の合計数）

さきに述べたように，この卒業生の分布は我が国内における国民高等学校への関心と理解の広がりを示唆するものと見ることができるが，それはとりもなおさず加藤を中心として展開されつつある日本国民高等学校運動の成果の一つの指標とも捉えることができるであろう。すなわち一人一人の卒業生が日本国民高等学校運動の使命に燃える農民として各地方に帰り農業に従事し，かつさまざまの形で農村における指導的役割を果たすとすれば，まさにそれこそが国民高等学校運動に外ならないのである。とすれば，上の表は開校後数年にして，地元茨城県を中心にして次第に北に南にその運動が広がりつつある姿を示していると見ることができよう。

(3) 農民教育諸機関及び農業学校等への影響

1931（昭和６）年10月発行の『日本農業年鑑』（昭和七年版）において，

日本国民高等学校長加藤完治は「国民高等学校運動」を主題として寄稿している。そこで加藤は国民高等学校の現況に触れ，自校の他に県立自治講習所（山形市・所長・西垣喜代次）と山陰国民高等学校（鳥取県東伯郡・校長・早川一男）の二つを「国民高等学校」として挙げ，さらに「これ等と相当密接の関係を有し共通の精神を以て立つ」「国民高等学校式教育機関」として，次の学校乃至教育機関を挙げている。即ち，上野原農学校（栃木県芳賀郡・校長・森本庫一），瑞穂精舎（長野県東筑摩郡・舎主・和合恒男），神風義塾（三重県鈴鹿郡・塾主・山崎延吉），三島郡農事講習所（大阪府三島郡・所長・遠藤正一），県立農事講習所（香川県仲多度郡・所長・相原言三郎），県立玖珠農学校（大分県玖珠郡・校長・土谷郁三），西海農学校（長崎県北松浦郡・校長・菅沼周次郎），台東農業補習学校（台湾台東・校長・中野安市），花蓮港農業補習学校（台湾花蓮港・校長・正木義男）の９つの学校または機関である[4]。

ところで，これより３年後1934（昭和９）年に協調会より発行された『農村に於ける塾風教育』によれば，「国民高等学校式教育」として次ぎの諸学校や教育諸機関が紹介されている。但し，さきに加藤によって挙げられた三島郡農事講習所と台湾の２校は資料の関係上掲載し得なかったという。また，香川県立農事講習所と上野原農学校（昭和８年農学寮となる）はその性格特性が異なるので国民高等学校とは別の範疇に入れたと説明されている。さらに，この編者は，加藤によって列挙されなかったものについても「今日一般に国民高等学校式教育なりと見做されつゝあるものに関しては便宜若干校をも併せて紹介する」[5] として，次の10校（または塾・講習所）を紹介しているのである。

4）財団法人　富民協会『昭和七年版　日本農業年鑑』昭和六年発行，283頁～286頁。

5）財団法人　協調会発行『農村に於ける塾風教育』，昭和九年，7頁。

名　　称	所　在　地	校長（塾主）	創立年月
山形県立国民高等学校	山形県南村山郡上山町	西垣喜代次	1933年４月
日本国民高等学校　★	茨城県西茨城郡宍戸町	加藤　完治	1927年２月
山陰国民高等学校　★	鳥取県東伯郡南谷村	早川　一男	1929年４月
瑞穂精舎　★	長野県東筑摩郡波多村	和合　恒男	同　年
神風義塾　★	三重県鈴鹿郡石薬師村	山崎　延吉	同　年４月
大分県立玖珠農学校	大分県玖珠郡森町	土谷　郁三	1911年４月
西海農学校　★	長崎県北松浦郡佐々村	菅沼周次郎	1930年９月
長野県青年講習所	長野県小県郡長村	郷原　　保	1929年４月
遊佐実業公民学校	山形県飽海郡遊佐村	尾形　長蔵	1927年５月
那加高等国民学校	岐阜市外那加村	北里　善従	1928年３月

★印は私立，他は公立。（『農村に於ける塾風教育』により作成）

ここにいう「国民高等学校式教育」とは「加藤完治氏を中心とする国民高等学校」[6]，すなわち山形県立自治講習所そして日本国民高等学校の影響を強く受け，あるいはそれに自ら同調していると見られる一群の教育機関という意味である。そしてその中心的「基調」となっているものは「古神道」であり，それが「その教育方法においても極めて独特の特色を発揮しつゝある」という。協調会によって収集された資料により検証を試みよう。

（一）山形県立国民高等学校　　この学校は，山形県立自治講習所と南村山郡上山農学校を廃止し，それら両者を合併統合し，上山農学校の校地，校舎が寄付されてそこに創立された県立学校である。初代校長に就任したのはそれまで７年間自治講習所長を勤めていた西垣喜代次であった。「創立要旨」によればこの学校は「日本皇道主義の理想に立ち，日本農村の現実に即し，日本独自の農業教育を行ふ学校」[7] とされている。そこにはかつて加

6）同書，3頁。
7）同書，9頁。

藤完治によって確立された自治講習所の伝統精神が継承されていることが明らかである。「学則」によれば，「本校は農業学校規程第十八条に依り建国精神を基調とせる農民精神を以て合理的経営に当り以て農村の振興及海外拓植移民に活動し得べき中堅農民の養成を目的とす」とされ，「施設経営の綱領」にも「塾舎教育」「自給自足」「拓植教育」「晴耕雨読」等の基本理念が明記されている。さらに「日課概要」によれば，朝五時起床・清掃に始まり，夜9時礼拝・就床に至る日課は，その細部に至るまでほとんど日本国民高等学校に準じていると言ってよい。かの「みそぎ」，日本体操（やまとばたらき）から，「二拝二拍手一拝」，教育勅語奉読，天皇陛下弥栄三唱，等々，まさに日本国民高等学校がそのモデルとなっているのである[8)]。

学科目及び授業についても，西垣校長が担当する「日本精神」が置かれ，同じく同校長の「農村経営」において二年次に「植民」が課されている。さらに「農業実習」は不定時とされているが，それは実習を軽視する意味ではなく，むしろ重視され晴耕雨読を旨としたものと見られる。それはさきの「日課概要」において，午後1時30分より日没までが「農場実習」とされ，さらに備考欄に「夏期は主として実習，冬期は学科」と書かれているところにも窺える。農業労働を重視する加藤精神がここにも受け継がれていると言ってよかろう。

(二) 日本国民高等学校　　本校についてはすでに前稿及び本校において詳述しているので，ここではこれまでに触れてこなかったいわゆる日本国民高等学校式教育の方法的特性の集約的表現ともみられる生徒の「日課概要」を紹介しておきたい。(「日本国民高等学校概要」『日本農村教育』所収，昭和9年)

一，日課概要

起　　床　午前五時若シクハ五時三十分，禊，清潔，整頓ヲナス。

8) 同書，13頁。

（太鼓合図）

武道，体操　五時半若シクハ六時ヨリ一時間，半数宛武道（直心影流法定ノ型）及ヒ日本体操（やまとばたらき）ヲ課ス。

礼　　拝　午前七時一同校庭ニ集合左ノ形式ニヨリ礼拝ヲナス
一，二拝二拍手一拝　　二，教育勅語奉読
三，天皇陛下弥栄三唱　　四，天晴れ，あな面白，あな手伸し，あな明け，おけ
五，二拝二拍手一拝　　六，挨　拶

朝　　食　午前七時

学　　科　自午前八時三十分，至正午

実　　習　自午後一時三十分，至日没

夕　　食　六時－七時

自　　習　七時－九時，一週間ニ撃剣柔道各二日，講義ヲナス場合モアリ

礼　　拝　九時，一同各宿舎ニ集合左ノ形式ニヨリ礼拝ヲナス
二拝二拍手一拝職員生徒相互ノ挨拶

（三）山陰国民高等学校　　この学校は，加藤完治が自治講習所長であった1924（大正13）年8月，同郡教育会主催の農村講習会で行った講話によって触発された地域の有志が，郡内の諸団体に働きかけ協議を重ね，「山陰国民高等学校期成同盟会」を組織し，加藤の日本国民高等学校開校の2年後1929（昭和4）年2月に開校したのである。みずから「山形県自治講習所，日本国民高等学校に次ぎその分身として旧陸軍演習廠舎跡に生れたる我国第三番目の国民高等学校である」[9] と自負している。形式的には私立であるが，この期成同盟会は東伯郡自治協会，同郡町村長会，産業組合東伯郡部会，東伯郡農会，同郡教育会，同郡青年団，その他共鳴者によって組織されたもので，実質的にはまさに公立乃至共立と言うに相応しい。

このような設立経緯からしてその目的，教育方針が前二者に準じていることは言うまでもない。「学科目」を見ても「皇国精神」や「皇国運動」が

9）同書，47頁。

置かれ，「日課」もまた日本国民高等学校方式そのものである。

（四）瑞穂精舎　　この私塾が設立された沿革を知る資料はないが，経営主体は財団法人瑞穂精舎，その目的は「農村における中堅人物及内外移住者の養成」，そして教育方法（むしろ教育方針というべきか）として「全部寄宿して百姓生活をなし，座禅，労働，学課等を行ふ」[10] と記されている。いわば一種の仏教的修行にも似た，まさに当時における「農村における塾風教育機関」の典型ともいうべき存在である。舎長和合恒男は東京帝国大学文学部出身で，国漢，政治，経済，衛生等の学科とともに「宗教」をも担当しており，また舎生の日課を見ると，「起床午前五時，読経坐禅」とされている。それらから察するに，あるいは仏教就中禅宗系の信仰を基礎としているように思われる。にもかかわらず，舎生の午前五時起床に始まり午後九時就床に至る，そして労働を重視する日課は日本国民高等学校式そのものである。しかも学科目の先頭に「皇国精神と農村経営」が置かれ，その講師は日本国民高等学校長加藤完治となっている。それだけではない。「体育」の項に「日本体操（やまとばたらき）を行ふ」と謳われているのである。さきの山陰国民高等学校と同様，そのモデルは明らかに山形県立自治講習所と友部の日本国民高等学校にあったのである。

（五）神風義塾　　創立者であり塾主である山崎延吉は，加藤完治にとって東京帝大農科大学における尊敬すべき大先輩であるとともに，周知の如く安城農林学校においては校長と部下，というよりむしろ恩師と弟子ともいうべき関係であった。そして加藤の山形県立自治講習所長就任に関しては推薦者矢作教授とともに山崎は加藤の活躍に期待しその就任を勧告した人でもあった。さらに日本国民高等学校の設立にあたっては，またもや山崎は同協会の理事を引き受け，以来理事として加藤の運動を支援してきた協

10）　同書，53頁。

力者の一人でもあったのである。

「神風義塾設立趣意書」のなかで山崎は「国家の基礎をなせる農村」の荒廃を憂え，その原因が農村振興に必要な人材の欠如にあると訴えている。しかも，そのいわゆる中堅的人材の育成は，今日一般に普及している「余りに形式的であり，物質的であり，功利的である」教育によっては不可能であり，いまや真に農村振興に貢献する人物を養い得る「人格中心の教育」の出現が望まれる。幸いにして「近来，此現象にあきたらず，憂国愛民の士が奮然立つて，国家のために農村振興を促進すべく，純真なる農民教育の衝にあたらむとする傾向を見るに至りしは，我皇国のために快心に堪へざる所である」という。そこには，暗に加藤らの日本国民高等学校運動に対する賛辞が贈られていることが窺えるが，それにつづいて彼自らの決意が訴えられている。すなわち「吾等同人は，不学不才を知ると雖も，一片愛国の至情は座視するを許さず，茲に神風義塾を設立して，我農村に真の農民を養成せむとするものである。」[11)]

さらに「皇国臣民としての責務に目醒め，国本を培ふ農民の任務に自覚し，不動の人生観に立脚して社会生活の向上に貢献し得る人物を養成するが我神風義塾の主義であり，義塾の教育の綱領である」と，まさに愛国的，農本主義的教育者というに相応しい信念が吐露されている。

教育方針，学科目，日課等に関しても日本国民高等学校と大同小異であるのみならず，加藤完治は外来講師として那須　皓，橋本伝左衛門らとともにこの塾の教育に協力しているのである。日本国民高等学校と義塾とはまさに相互乗り入れの関係にあり，恰も親類関係にあったと言っても過言ではない。

（六）大分県立玖珠農学校　　1911（明治44）年玖珠郡立実業学校として発足し，その後農学校に転換するなど紆余曲折を経て県立に移管され（大正

11）同書，59頁。

12年），そして1927（昭和２）年４月上記「大分県立玖珠農学校」と改称された。と同時に，教育の目的・方針に関しても新機軸を打ち出したようである。その「目的」「教育精神」に曰く，

「目　的

国民高等学校としての教育精神を採り，人格能率共に高く，真に職業的信念に覚醒せる青年を教養して之を農村に送り，時弊を匡救し，国本に培ひ，思想を善導して，将来農村の原動力たらしむるため，農業に従事せんとする者に信念ある人格教育を施し，須要なる知識技能を授け，農村文化の建設に貢献すべき人物を養成するを以て本校の目的となす。」

「教育精神

生徒をして日本民族の理想信仰を持し，農民たる天職を自覚せしめ，確固たる信念を与ふるに在る。」[12)]

そこには実に鮮やかな国民高等学校教育精神への転換が見られるであろう。しかし，果して実質上どのような変化が現れていたのだろうか。制度的にはこの学校は，「修業年限二ヶ年の高等小学校卒業，或は之と同等以上の学力ある者」を入学資格とする男子の二年制と三年制さらに一年制の高等研究科をもつ農学校である。したがって基本的には農業学校規程にもとづく学科目や授業時数を変更することは難しい。少なくとも「課程表」を見る限り，ごく普通の農業学校である。そのような制約のなかでどのようにして国民高等学校式教育を実現したのであろうか。それはこの学校の「日課」によって窺い知ることができる。その日課表によると，

時　　限	事　　項	備　　考
前５：00－ ５：30	起床，清掃，禊	
５：30－ ６：30	点呼，礼拝，体操	二拝二拍手一拝挨拶
６：40	朝食	
７：40	登校（自習）	
７：50	朝礼	形式日本体操，参拝，君が代（此間

12）　同書，70頁。

		国旗掲揚），勅語奉読，陛下弥栄三唱，最敬礼，挨拶
8：10－11：50	学科	
後0：10	昼食	
0：50－ 5：00	農場実習	
6：10	夕食	
7：00－ 9：00	自習	
9：00	礼拝	朝と同じ
9：30	消灯	

（『農村に於ける塾風教育』76頁の表より作成）

午前5時起床より午後9時半消灯に至る日課はいわゆる国民高等学校式そのものである。しかし，同校の生徒のうち寄宿舎収容人員は昭和6年現在21名となっている。とすると大半は通学生である。したがって通学生にとっては朝礼から農場実習までの日課がこの表に従っているということになる。とはいえ授業や訓育のなかで可能な限り前掲の目的・教育精神の実現に努力が注がれたに違いない。

（七）西海農学校　この学校は予備役の海軍少将菅沼周次郎が農村の困憊を深く憂え，真に農村振興に貢献しうる青年を育成することを目指して，みずから私財を投じて設立したものである。「西海農学校設立趣意書」によれば，「世人往々にして農業を蔑視し，……農を厭ひ農を避け相率ひて田園を去つて都市に集中する陋風を醸し」，そのために「農学校さへも或は斯る謬見に禍され実生活と縁遠き技術教育に堕し，其の修了者すら農業生活を立つる事能はずして俸給生活に移るもの比々相継ぎ」，ついに「農学校益々多くして農村愈々困憊する奇現象を呈せんとするに至る。」まさに「嘆ぜざらんとするも豈堪ふ可けんや」と慨嘆し，この悲しむべき農村そして農業教育の現状を打開し，「農村振興の一端たらしめんこと」を期して，この学校の設立を決意したのである[13]。

13）同書，83頁。

「目的」に曰く，「農村に於ける中堅青年の養成，並内外移植民の養成」，「教育方針」として，「生徒をして日本人たることを自覚せしめ，農業の何たるかを明白に知らしめて，尽忠報国の精神を涵養せんとするものである。之がため職員生徒は，共に校長を中心とする一家族として各自の分担に励み，真剣なる労働によって崇高なる精神を体得するに力む。」と，示している。

このような当時の農業学校教育への失望と批判から出発した菅沼の農業・農民教育観，したがって西海農学校の教育理念乃至精神には，表現の差異はあるにしても，基本的には加藤や山崎と共有される思想が読み取れるのである。それを具体的に裏付けるものはこの学校の「日課」である。ここにそれを紹介することは避けるが，まったくと言ってよい程に日本国民高等学校式がモデルとなっている。また，菅沼校長の下に指導に従事する「教師及講師」のなかには，日本国民高等学校研究科修了者 2 名，同本科一部修了者 1 名が専任として在職している。しかもこの 3 人のみが専任教師で，他は兼任教師または講師である。この専任教師 3 名はそれぞれ，東大農学部または農林学校の卒業生でもある。

寄宿舎は収容人員15名となっている。そして専任職員3名が舎監を勤めることとされている。小規模にしてまさに「校長を中心とする一家族」として「子弟共働」の生活を通して所期の目的を達せんとする意図が，そこにも窺えるのである。(『農村に於ける塾風教育』参照)

(八) 長野県青年講習所　　創立の経緯を知ることはできないが，設立の目的及び教育精神として次のように記されている。

目　　的　「時代の趨勢に鑑み青年教育の必要より，農村に於ける中堅人物並海外発展に志す青年の養成を目的とす。

教育精神　「労働体験に基く思想信念の確立」[14)]

14)　同書，92頁。

この講習所に関しても特徴的なのはその「日課」である。すなわち山形県立自治講習所と同様，起床後の禊，室内外掃除に次いで皇国運動（やまとばたらき），礼拝がある。

学科は8時－11時（農繁期はこの限りにあらず）となっているが，昼食後，作業が午後2時－7時。夜は礼拝8時半，そして消灯9時，延灯9時－11時となっている。

寮舎の収容人員は30名。舎監には所長と専任の教師兼書記一名が宛てられている。まさに国民高等学校式というべきであろう。なお，この調査では，卒業後の状況は「主として家事労働に従事す」と記されている。

（九）遊佐実業公民学校　　この学校は大正時代よりこの地方に漂っていた「勤労教育を主とする簡易なる農学校設立の意嚮」が，県当局の奨励と遊佐村長高橋某の熱意により，遊佐，稲川，蕨岡の三ケ村組合学校として設立されたものである。当初「実業学校令」に準拠して発足し，その翌年（昭和3年）「青年訓練所規定」により認可されたと記載されているが，その詳細な経緯は不明である。その「目的」は「農村中堅人物の養成」とされ，その「教育方針」は次のように述べられている。

「農村中堅人物の養成も，忠良なる臣民，善良なる国民としての教養を目標に，勤労教育を主とし，諸々の知識を与ふることは従である。之がため入学後の一ヶ年間は職員は，昼夜生徒に接触して各自の個性を充分理解することに努力し，二年以上は家庭実習を主とし，登校日数は一ケ年三十五日乃至五十日に減少する。蓋し生徒の家庭に於ける実習は父母，兄弟，姉妹並部落に及ぼす効果極めて大なりと信ずるが故である。」[15)]

そこにはいわゆる農学校とは異なる「勤労教育」中心かつ「子弟共働」の青年教育という，まさに「国民高等学校式」と言ってもよい教育方針が表明されているのである。なお，特徴的なのは，2年目以後の生徒の家庭

15）同書，98頁。

実習によって家族や地域社会にまで教育的影響を及ぼそうと意図しているところである。

さらにこの学校が加藤らの国民高等学校運動を多かれ少なかれモデルとしていたと思われるのは，やはりその生徒の「日課」である。同校の「寄宿生日課」を見ると，

起　　床　午前 4 時半，武道，皇国運動，謡曲，軍歌，美化作業，炊事，礼拝，君が代
（中略）
学　　修　8 時半より正午迄
午　　食　正午
学　　修　午後 2 時半迄
作　　業　4 時迄
（中略）
礼　　拝　心の力朗読，反省
所感発表　約20分
就　　床　8 時半

となっており，やや学科に傾斜し，作業時間が短いとはいえ，起床後及び就寝前の儀式的行事は，自治講習所や国民高等学校に共通しているのである。なお学科に傾斜しているのは，一年次に学科が集中し，二年次以後は極端に実習（家庭実習）中心に移行するからである。それは学科の年間授業時数に見られる。すなわち普通科一年次1300，同二年次322，同三年次210，高等科一年次210，同二年次210となっている。したがって基本的にはやはり「勤労教育」中心なのである。

（十）那加高等国民学校　　この学校に関しては極めて調査資料に乏しい。しかし，その目的及び教育精神に関する限り「国民高等学校式」と言うに相応しい。

「目　　的」　農村に於ける中心人物の養成

「教育精神」　確固たる人生観を与へ，農業労働に飽迄も精進する奮闘

的精神を涵養せんとするものである[16)]。

そこには加藤完治の農民教育思想をそのまま継承しているかのような印象を与えるものがある。この学校は県立とはいえ，あたかもデンマークの民衆（国民）高等学校が，元来農閑期に開かれる青年教育機関であったのと同様，農閑期を利用して授業を行う極めて小規模の農村青年の学校である。したがってその授業表にはこの地方の農繁期と見られる6，8，11月は省かれ，しかも「農閑期授業」も授業日数は極めて少なく計画されているのである。すなわち授業日数は年間合計75日で，各月の授業日数は下記の通りである。

4月……10日	7月……5日	10月……5日	1月……10日
5月……5日	8月……0日	11月……0日	2月……12日
6月……0日	9月……10日	12月……5日	3月……13日

授業科目も，修身，公民，農業，実習，体育となっており，極めて少ない。しかも実習は「不定時」とされている。むしろ，家庭労働が実習と見做されていたのであろう。学校の実習地はあるが，僅かに3反歩の借地である。とはいえ，そこが当時における地域農村・農家の実状に即し，それに密着した青年教育であったのではなかろうか。

3. 日本国民高等学校の満洲進出と移民運動の展開

(1) 日本国民高等学校分校の開設と満洲移民運動への着手

加藤完治が自治講習所長時代の或る時期から植民運動に着手した経緯については，すでに拙稿「近代日本における国民高等学校運動の系譜」（四）において触れたが，それは日本国民高等学校にも引き継がれ，さらにより本格的な運動として展開されることとなるのである。前稿（五）において見たように，「日本国民高等学校学則」はその第二条において生徒の五部編成を定めているが，そのなかで「第二部（次三男教育）にありては年齢満

16) 同書，105頁。

二十歳以上の次男以下の農家子弟にして将来拓地植民に従事する者を養成す」と規定している。そして「教科目」として「殖民」が「時数・2」として加えられている。すなわち日本国民高等学校は植民教育を重要な教育目的の一つとして掲げることとなったのである。したがって，先程紹介した「卒業生一覧」及び「分布状況」にもそれが結果として現れているのである。勿論それがすべて加藤の，そして日本国民高等学校の教育ないし運動の結果であるとすることには問題があるとしても，その影響が大きかったことは否定できないであろう。加藤は自治講習所時代，最初の欧州視察を終え帰国して間もない1924（大正13）年5月に那須等に呼びかけて朝鮮開発協会を設立，その翌年から朝鮮に青年を送っている。同時に満洲への移民を考え現地の視察をも試みたが，このときには満洲への移民は実現されなかった。しかしこの頃から拓殖講習会を開くようになり，みずから開墾に励むとともに，開墾労働を教育訓練の方法として重視するようになったのである。

日本国民高等学校発足以後，加藤が満洲移民を積極的に推進するようになったのは，満洲事変勃発の翌年1932（昭和7）年1月からであった。それは，かねてから加藤の満蒙植民論に共鳴していた山形県東村山郡在住の予備役陸軍中佐角田一郎が，わざわざ友部を訪ね加藤にその実現への努力を懇請したことに始まった[17]。直ちに彼は荒木陸相や高橋蔵相に面会して満洲移民の必要を説いたが，その目的を達することはできなかった。さらに恩師でもある農学界の元老古在由直博士を説得し，たまたま開催中の農林学会の参加者に対して，石黒忠篤，那須皓，橋本伝左衛門，宗光彦[18] の各氏とともに満蒙植民に関する意見を開陳した。加藤はまた，石黒，宗氏らとともに6000人移民案を作成して拓務省に働きかけた。そのような運動がついに拓務省を動かし，同年3月に「満蒙移植民計画」が第61回臨時国会に提出される運びとなったが，その計画は閣議の段階で否決され実現しな

17）満洲開拓史復刊委員会編『満洲開拓史』昭和55年，37頁。

18）同書，39頁。なお，宗光彦は当時満鉄公主嶺農業実習所長であった。

かった[19]。

そこで加藤はみずから満洲に乗りこみ関東軍司令官本庄中将や作戦主任参謀石原中佐と直接交渉し，ついに奉天（現在の瀋陽）北大営に旧兵舎と土地を借り，そこに日本国民高等学校分校を設置し（同年４月），帰国した加藤は本校の農場主任野々山彦隘をこの分校長に赴任させるとともに，国民高等学校卒業生や選ばれた青年を送りこみ現地における植民訓練を開始したのである。彼の同志であり，野々山が赴任するまで同分校の責任を任されていた宗光彦はこの頃の状況を次のように語っている。「私は公主嶺農業実習所の修了生三名を引き連れ五月十七日北大営に乗り込み，建設準備に着手したが，六月一日友部の国民高等学校から選抜された一騎当千の先遣隊員十二名を迎え，ここに北大営日本国民高等学校の建設が本格的に開始されたのであった」[20] と。帰国した加藤は彼の信頼する山形の自治講習所長（1933年より県立国民高等学校長）西垣喜代次等の協力により逐次日本の青年をここに送り込んだのである。こうして加藤の日本国民高等学校運動は中国大陸（旧満洲）に進出し，移植民現地教育・訓練を開始することとなったのである。

加藤らの国民高等学校運動はその後さらに一般の満洲移植民事業にとって重要な役割を担うこととなった。さきに加藤が関東軍参謀石原中佐に会見したことに触れたが，そのとき石原から彼の部下東宮大尉を紹介された。それはこの東宮がかねてから熱心な満洲移民の提唱者であり，いわゆる「武装移民団」（東宮はこれを「屯墾軍」といった）の設置を具申していたからである。加藤は早速東宮大尉と会談したが，そこで二人は意気投合し，在郷軍人のなかから選ばれた移民団を編成して満洲に送り込むという，この武装移民団計画を推進することが約束されたのである。かの五・一五事件のあと大臣の更迭が行われたこともあり，加藤の満洲移民計画はついに政府によって受け入れられ，この年（昭和７）年８月の第62臨時国会におい

19）同書，45頁。

20）同書，60頁。

て拓務省提案の「満洲移民事業計画」は承認されたのである。

こうしていわゆる［試験移民」が数次にわたって送られることになったが，その準備教育を拓務省の委託により友部の日本国民高等学校や山形県立自治講習所等が引き受けることになったのである。また満洲北大営の日本国民高等学校分校は，しばしばこれら移民団の一時的拠点として，また短期の準備訓練所としての役割を果すことになったのである。加藤は第一次の試験移民団（423名）にみずから随行し，講話などによる訓練を継続し補充したのであった。そして北大営に立ち寄り国民高等学校で訓練された参加者（60名）を追加して，入植拠点の佳木斯まで同行した[21]。それは発案計画者としての彼の責任と期待，それ故にまた成功への願いと不安の現れでもあったのではなかろうか。確かに入植後，予想し得なかった事件や問題が発生したのである。満洲人の反満抗日勢力（いわゆる匪賊）の襲撃，内部抗争そして集団ノイローゼ（後に「屯墾病」と名づけられた）[22] に悩まされ，急遽加藤が内地から駆けつけたこともあった。この試験移民は勿論二次以後も続いたのである。募集の範囲が広げられ準備訓練の場所も各地に設定されたとはいえ，加藤そして日本国民高等学校は益々深く満洲移植民事業と関わっていったのである。

(2)　満蒙開拓青少年義勇軍

①試験移民の訓練

日本国民高等学校本校は上に述べたように，1932（昭和９）年９月に第一次満洲試験移民団の準備訓練を委託され，実施したのであった。この受入れは同校の組織編成にとって必ずしも無理ではなかったと思われる。何故ならば，前稿で見てきたように開校時すでに五部編成が予定されており，その第五部（短期講習）において「学校教員其他青年に対し皇国精神発揚に関する講習会等を随時随所に開催す」と定めていたからである。ただし

21）　同書，93頁。

22）　同書，109頁。

一挙に206名の，しかも青年ではなく在郷軍人だったのだからかなり苦労は多かったことであろう。とはいえ，それも加藤にとっては日本国民高等学校運動の一環であったに違いない。のみならず，友部の本校のいうなれば出先機関として設置された北大営の分校においては，友部より一足早く，本土から送られた青年の満洲開拓教育に着手されていたのである。そしてそれが満洲開拓試験移民の推進に重要な役割を果たしていたのである。

ところでこの試験移民は，さきにも触れたように必ずしも順調に事が運ばなかったのである。今にして思えば，そもそも日本の無理な旧満洲支配を背景にし，しかもその一翼を担う目的として企てられた移民計画であったのだから，当然そこには多くの危険と困難が予想された筈である。だから片手に銃，片手に鍬のいわゆる武装移民として，在郷軍人のなかから選ばれた人達をもって編成されたのであった。したがって参加した団員たちはかなり固い決意があった筈である。しかし，現実の状況はこれらの人々にとって予想以上に厳しかったのである。それ故に，彼らのなかには外圧の危険に不安動揺し，心身を消耗して脱落する者も出たし，また幹部に対する反抗や仲間同志の対立によって集団の崩壊現象をもたらすような事態もしばしば生じたのである。

この憂慮すべき移民団の現実に直面して，加藤とともにこの計画のそもそもの提案者であった東宮大尉は，この年（昭和7年）12月に，この問題状況を分析した上で今後の対策についての要望を「第一次武装移民の精神動揺状況および第二次以後の人選に関する要望書」として発表している。このなかで彼が書いている自後の移民に関する要望は，後の「満蒙開拓青少年義勇軍」制度の創設につながったものと思われる。すなわち東宮はこの問題状況の根本原因はその人選にあったとして，第二次以後の人選において可とされるべきは次のような条件を備えた人物であると云っているのである[23]。

23） 同書，108頁。

一，北大営国民高等学校出身者は最も可なり

佳木斯到着以来一名の非行者なく，常に移民隊の中堅たり。これが為め思想正統にして意思確固，困苦を厭わず，進んで難局に当り薄志党との間に不和を生ぜしことすらあり，警備に当りても勇敢なり

二，貧困者にして活路を満洲に求めんとして渡満せるものは可なり

かかる者にして一般流言を聞き同輩の非行を見るときは，憤慨且つ将来を危ぶみ指導官のもとに来りて同志の者のみにて直ちに入郷し農耕，建築の準備を行ないたしと願い出ずるもの多し。

第二次以後は年令等に拘泥することなく，かかる方面より多数採用するを要す。

三，純真の年少者は可なり

将来青少年中よりも採用するを可とせん

東宮大尉のこの「要望書」（むしろ「報告書」というべきか）はその後の満洲移民対策に関して，関東軍は勿論現地及び内地の関係省庁や諸機関さらには関係者に対して，極めて重要な反省の材料と示唆を与えたに違いない。そうしてこれがやがて「満蒙開拓青少年義勇軍」の創設にもつながっていったのである。その経緯については後に触れるとして，いまここで指摘しておきたいのは，東宮が「北大営国民高等学校出身者」を「最も可なり」と，極めて高く評価したことである。すなわち加藤の日本国民高等学校の教育・訓練の成果を認めかつ大きな期待を寄せているということである。それは同志加藤完治の学校に対する単なる儀礼的賛辞ではなかったであろう。それはまた同時に，満洲移民訓練の重要性とそのあり方に対して警告を発するものであったことはいうまでもない。

②青少年移民訓練の試行――青少年義勇軍創設への胎動

在郷軍人を主力とする試験移民に対して東宮はかなり大きな失望感を抱いた[24]。それはさきに紹介した「要望書」にも表明されている。彼がとくに

24）同書，230頁。

「純真の年少者は可なり」とし，「将来青少年中よりも採用するを可とせん」と訴えたのはそのためであろう。そして彼は間もなく「少年隊」の入植訓練の実験を始めたのである。その経緯はすでに多くの人々によって紹介されているので省略するが，この試みに関しては事前に加藤とも相談したという。こうして東宮は13名（うち5名は加藤が送った）[25] の日本少年をもってソ満国境の饒河に初めての青少年試験移民を開始したのである。それは1934（昭和9）年10月であった。これが「大和北進寮」と名づけられ，当時世に「饒河少年隊」として讃えられたものである。この少年隊は第二次，三次と続けられたがその後満蒙開拓青少年義勇軍制度が創設されたことにより，やがて義勇軍訓練所に移行していったのである。

ところでこの饒河第三次少年隊は，日中戦争の始まる直前の1937（昭和12）年6月から日本国民高等学校の内原訓練所において1ヶ月の訓練を経て，7月に現地に到着したのであったが，その翌月に加藤らは別の少年隊を城子河（16名）及び哈達河（14名）に，さらにその1ヶ月後に伊拉哈（100名）に送り込んだのである[26]。この伊拉哈少年隊は正式には「開拓訓練生」と呼ばれ，いわゆる満蒙開拓青少年義勇軍の先駆であり，しかもその第一陣であったという。なぜなら，満蒙開拓青少年義勇軍の制度の原案となったものは，すでに昭和12年7月に関東軍参謀部第三課から提示され，日満両国の移民関係団体の会議で承認された「青年農民訓練所（仮称）創設要綱案」において（正しくはその備考において）予定されていたからである。いうなれば事は先に進められ，会議においてその事後承諾が求められたということであろう。

この「青年農民訓練所創設要綱案」[27] はまず「方針」として，「純真なる日本農村青少年の現地訓練により，真の建国農民たるに必要なる精神を鍛練陶冶するとともに，満洲開拓を促進し民族協和を徹底し，以て満洲建国

25）同書，231頁。
26）同書，239～240頁。
27）同書，242頁。

の理想実現を期す」と謳い，その「要領」で訓練所の設置とその運営・訓練内容等についての基本指針を示している。そこで注目されるのは，経営は満洲拓殖公社が行うこと，対象とする青少年は「16歳ないし19歳の男子」で，訓練は「満20歳まで」としていること，すなわち徴兵検査までということである。また「備考」において，この訓練所は「昭和12年 8 月より開始し，遅くとも昭和14年12月までに約 3 万人の収容を終了する」ことを予定しており，「昭和12年には一か所，同13年に二か所，計三か所を開設す」とも述べている。そして「本年度の開設地は竜江省嫩江県靠山屯地区とす」としているが，さきの伊拉哈の訓練所はまさにそれに違いないであろう。

③満蒙開拓青少年義勇軍の創設

「青年農民訓練所創設要綱案」が拓務省で承認され，閣議決定を待つばかりとなったとき，加藤完治や石黒忠篤等はこの案を支援するため『満蒙開拓青少年義勇軍編成ニ関スル建白書』を作成し，当時の近衛首相ほか各閣僚及び内閣参議に提出したのである。それはこの年（昭和12年）の11月 3 日であった。そして名を連ねたのは次の面々であった。

石黒忠篤	（農村更生協会理事長）
橋本伝左衛門	（満洲移住協会理事）
大蔵公望	（満洲移住協会理事長）
加藤完治	（満洲移住協会理事）
香坂昌康	（日本聯合青年団理事長）
那須　皓	（満洲移住協会理事）

これら 6 名の人々のうち 4 名が日本国民高等学校協会の役員であり，かつ個人的にも相互に親しい間柄にあったことは，決して偶然ではあるまい。

さて，『建白書』は「満蒙開拓青少年義勇軍ノ為サントスル所ハ，我青少年ヲ編成シテ勤労報国ノ一大義勇軍タラシメンガ為ニ，全満数ヶ所ノ重要

地点ニ大訓練所ヲ設ケテ此ニ入所セシメ，開拓訓練即教育，軍事教練即警備ナル現地ノ環境ニ即セル方法ニヨリテ，日満ヲ貫ク雄大ナル皇国精神ヲ錬磨セシメ，之ヲ以テ他日堅実ナル農村建設ノ指導精神タラシメ，併セテ満洲農業経営ニ必要ナル知識技能ヲ修練セシムルニアリ。」[28] しかも，この提案はすでに饒河の北進寮，伊拉哈の先遣入植の実績により検証されており，現地においては既に関東軍，満洲拓殖委員会を始め，満洲国政府諸機関，満洲拓殖公社，南満洲鉄道株式会社，並びに既設移民団等各方面の絶大なる支持後援を得ているとして，「今ヤ満蒙開拓青少年義勇軍ガ大挙渡満スベキノ機将ニ熟セリト云フベシ」と即時断行を促しているのである。さらに『建白書』は「此ノ一挙ガ明日ノ日本ヲ背負フ青少年一般ニ及ス精神的効果」に言及し，「凡ソ皇国ノ真ノ国難ハ，外敵ノ如何ニアラズシテ国民思想ノ健否ニ存ス。政府ノ国民精神総動員ヲ提唱スル所以，亦之ニ外ナラザルベシ。然ルニ今日ノ国内情勢ハ，青少年ノ精神ヲ鍛練陶冶シ，其ノ士気ヲ愈々旺盛ナラシムベキ環境ニ乏シク，銃後ニ於テ動モスレバ第二義的活動ニ心身ヲ消耗セントスル実情ニアリ。」それ故にこそ「青少年義勇軍ハ斯ル危機ヲ転ジテ真ニ国民精神ヲ作興スル一大国民運動タラザルベカラズ」[29] と，今この青少年義勇軍創設に踏み切ることが，日中戦争の危機下における国民精神総動員とりわけ青少年の精神作興にとって重大な効果を及ぼすものだと，政府当局に対して厳しく進言しているのである。『満洲開拓史』によれば，この提言は直ちに11月30日の閣議に「満洲に対する青年移民送出に関する件」として上程され，決定された。この決定に基づいて，さきの「石黒，加藤，那須，橋本，大蔵の諸氏は拓務当局と協議を進め」，「内地訓練所の建設を日本国民高等学校協会および満洲移住協会の責任において実施することに決定した」のである。

こうして日本国民高等学校は「満蒙開拓青少年義勇軍」の内地訓練所を

28) 白鳥道博解題『満蒙開拓青少年義勇軍関係資料』第一巻，不二出版，1993年，6頁。

29) 同書，9頁。

引き受けることとなり，その年の11月頃から1万人の大部隊の収容可能な訓練所施設を内原農場に設営することに着手したという。そして同校建築担当者たちの不眠不休の努力によって構築されたのが，かの「日輪兵舎」であった。

日本国民高等学校協会の記録によると，1935（昭和10）年4月3日，茨城県東茨城郡下中妻村内原で日本国民高等学校移転新築の地鎮祭が行われている。その校地は80町歩であった。友部は総面積約58町歩であったから，かなり広い校地をもつことになったのである。そして義勇軍内地訓練所はこの日本国民高等学校に隣接する松林のなかに設営されたのである。本校はまず1938年3月に青年部が内原に移転し，翌年2月に女子部，最後に1942年に少年部が移転し，移転を完了したのである。また，満洲北大営の日本国民高等学校分校は1935年4月にハルビンの郊外王兆屯に移転されたが，同年11月に廃校とされ，満洲移住協会（加藤もこの協会の理事を務めていた）に移管された。（日本国民高等学校協会編『写真で見る60年の歩み』昭和62年発行参照）

満蒙開拓青少年義勇軍の募集は拓務省により早速1938年（建前上は4月からとなっていたが）1月下旬から開始されたところ，同月下旬には早くも内原に入所して来る者が現れ，3月上旬までに約6500名の入所を完了したという。こうしていよいよ満蒙開拓青少年義勇軍の内地における訓練が始まることとなるのである。（『満洲開拓史』による）

④内原訓練所における教育・訓練

満蒙開拓青少年義勇軍の教育・訓練は，内地訓練約2ヶ月，現地訓練約3ヶ年（「昭和十三年度募集要綱による）となっているが，ここでは内原における内地訓練に限って考察することにした。なお，数年後に出された訓練所概要によれば内地訓練期間は「凡ソ三ヶ月」とされている[30]。

30）同書，第二巻，4頁。

〔組織編成〕

前にも触れたが，この訓練所は日本国民高等学校に隣接する土地に，蒙古の包（パオ）に模したいわゆる日輪兵舎をもって設営された。その数約300棟，そしてその他に指令部，大講堂，本部などの建物があった。日輪兵舎は一棟に60人が起居を共にするように作られており，訓練生はそこに収容されたのである。

日本国民高等学校長加藤完治はこの年3月1日内原訓練所長に就任したのである。所長を頂点として編成された訓練所の組織はまさに軍隊のそれに近いものである。すなわち，訓練所長の下に本部か置かれ，それは総務部，訓練部及び警備指令部の3部に分かれている。総務部は総務，庶務，経理，衛生，栄養の各業務を，訓練部は学事，農事，教練，武道，特技の各業務を，それぞれ統括している。訓練生は60名を1小隊とし，5個小隊300名をもって1中隊とし，これを訓練の単位とされたのである。さらにこの中隊5個によって1大隊が編成され，訓練生1万人をもって6個大隊編成とし，昭和13年度中に3万人を訓練して現地に送ることが予定されていたのである。(『満洲開拓史』)

〔教育・訓練の目的・方針〕

この年（昭和13年）1月付で出した『満蒙開拓青少年義勇軍募集要綱』は，募集の「趣旨」として「我日本青少年を大陸の新天地に進出せしめ満蒙の沃野を心身練磨の大道場として日満を貫く雄大なる皇国精神を鍛練陶冶し，満蒙開拓の中堅たらしめ以て両帝国の国策遂行に貢献せしめんとす。」[31] と述べている。そこでは内地訓練と現地訓練に関して特にその目的の記述は見られない。その後拓務省が出した要綱『昭和十三年度満蒙開拓青少年義勇軍募集』では，内地訓練と現地訓練に関するより詳しい説明があり，「内地訓練は諸君の心身を鍛練して，満蒙開拓者として必要な心構へと協同精神を涵養して現地訓練入所の準備をする目的である」[32] と書かれ

31) 同書，第四巻，3頁。

32) 同上，10頁。

ている。

これに対し直接訓練に携わる内原訓練所から出された1942（昭和16）年の『満蒙開拓青少年義勇軍訓練所概要』は，「訓練要項」として次のように記している[33]。

イ，綱　領

我等義勇軍ハ天祖ノ宏謨ヲ奉ジ心ヲ一ニシテ追進シ，身ヲ満洲建国ノ聖業ニ捧ゲ　神明ニ誓ツテ天皇陛下ノ大御心ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

ロ，訓練方針

○日本精神ノ顕現開拓魂ノ涵養ニ務メ，勤労愛好ノ心性ヲ培養ス

○困苦欠乏ニ耐ヘ，異ナル気候風土ニ対スル，身体ノ抵抗力ヲ養成ス

○尊長ノ美風ヲ助長シ，一致団結，親和互譲ノ徳性ヲ涵養ス

これは，早くから東宮大尉とともに試験移民次いで少年隊の満洲派遣を試み，幾多の事件や困難を身をもって体験してきた加藤所長の確信と期待の表明であると思われるが，同時に，その底流となっているものは日本国民高等学校運動の精神ではなかろうか。

〔教育・訓練の内容と方法〕

上のような訓練方針の下に，どのような教育・訓練が行われていたのであろうか。この『訓練所概要』によれば，「訓練課目及日課」[34]として

イ，学　科	皇国精神，満洲植民問題，現地事情，満洲農学大意，国語，国史，地理生理衛生，軍事講話，習字，課外講話	
ロ，実　科	教練	一般教練，陣中勤務
	武道	直心影流法定ノ型及剣道，柔道，角力
	体操	日本体操，基本体操，馬術，駈走等

33）同書，第二巻，5頁。

34）同上，5～6頁。

農事　開墾，一般農事，土木
特技　栄養，農産加工，建築，畜産，鍛工，縫工，灸療，喇叭

ハ，日　課　（時間割ハ変更スルコトアルベシ）
生活訓練ノ中心ハ中隊単位トシ，必要ニ応ジ全軍大隊小隊トス

	時　刻	合図	行　事
午前	6：30	太鼓	起床，洗面，
	6：30－ 7：30	喇叭	点呼，礼拝，体操，武道，教練等
	7：40	〃	朝食
	9：00－11：30	〃	学科，教練，作業
	12：00	太鼓	昼食
午後	1：30－ 5：00	喇叭	教練，武道，作業
	6：00	〃	夕食
	6：30－ 8：00		入浴，自習，放送，詩吟，唱歌
	8：30	太鼓	点呼，礼拝
	9：00	喇叭	消灯

（期節ニ依リ多少変更アルモノトス）

ニ，休養日　日曜，祭日

上に掲げた学科，実科，及び日課を見てまず感じることは，まさに義勇軍の名に相応しく軍隊式の教育であり，それは広義の教育には違いないが，その極端な強制と鍛練主義とは，むしろ「訓練」と呼ぶのが妥当であろう。だから「訓練課目及日課」としたのであろう。それはこの教育が短期間にその目的を達成しなければならなかったという事情，さらにその背景にあるこの時代就中戦時下の我が国教育界の動向，等を考慮するとしても，やはり加藤完治固有の，したがって日本国民高等学校式の教育理念，教育方針，さらには教育実践の方法そのものであったといってもよかろう。

それは特に，学科においては「皇国精神」，実科における「武道」就中「直心影流法定ノ型」，「日本体操」（やまとばたらき）である。そして「日課」はそのまま日本国民高等学校式というべきものである。朝の「礼拝」それは「二拝，二拍手，一拝」次いで「あっぱれ，あなおもしろ，あな手伸し，……」であり，体操はまず「やまとばたらき」であった。「礼拝」は

夜の点呼の後にも行われるのである。

これらの日課は毎日中隊長の指揮・指導のもとに実践させられたのである。しかし，義勇軍は国民高等学校と異なる使命をもっていた。したがって毎朝礼拝のあと，義勇軍の「綱領」を中隊長の発声に続いて唱えたのである。昭和15年 3 月に入所し，その年 9 月に渡満したある隊員はこの当時を回顧して次のように書いている。

> 「この朝礼こそ義勇軍生活訓練の基本であった。義勇軍は皇国農民として優秀な資質を持つ建国農民を養成することを主眼にしていたからいかなる場合でもこの礼拝行事を欠かせてはならなかった。雨が降ろうが，風が吹こうが，この朝の礼拝を欠かせて義勇軍の生活はなかった……」（合田一道『夕陽と青春――満蒙開拓青少年義勇軍の記録』昭和54年刊より）

まさに内原における義勇軍教育は朝礼に始まる生活訓練がすべての基本であったのである。「綱領」も，また皇国農民の精神も単なる紙面の文字や講義の言葉にとどまらず日課のあらゆる生活活動のなかで訓練陶冶するという仕法である。それはかの自治講習所以来変わる事なく加藤の信念となっている農民教育の手法である。さらに云えば，内原訓練所の「綱領」と日本国民高等学校運動の思想とは，基本的に加藤のいわゆる「理想信仰」に貫かれていたのである。ただその両者に差異があるとすれば，当時の「満洲国」の政治的，軍事的事情及び気候・風土的条件に対する配慮が，義勇軍の教育訓練においては極めて重要であり，そのための知的・情意的，また身体的・技能的な力量を養う訓練を必要としたということであろう。それは訓練課目の学科や実科の内容によっても読み取ることができるのである。とはいえ，やはり加藤にとっては満蒙開拓青少年義勇軍の訓練もまた日本国民高等学校運動の一環であったのである。

以上見てきたような約 3 ヶ月間の内地訓練を終わると訓練生たちは，現地訓練を受けるために満洲に送られ，先ず数個所の大訓練所に分かれて入

所し，ほぼ1年間開拓民としての基本的な訓練をうけた後，さらに小訓練所において約2年の農事実務訓練を受けることになっているのである。ところで，内原の訓練を終えて現地に送られた青少年は発足の年から最後となった敗戦の年までの8年間に，なんと86,530名に上ったのである。内原訓練所送出名簿によると年度別の数は次の通りである。(『満洲開拓史』)[35]

昭和13年度	21，999名	昭和17年度	11，795名
同　14年度	8，887名	同　18年度	10，658名
同　15年度	8，922名	同　19年度	7，799名
同　16年度	12，622名	同　20年度	3，848名
	合　計	86，530名	

4.　加藤完治における日本国民高等学校運動の基本的性格

(1)　運動の模索と理念の生成——山形県立自治講習所に始まる

すでに日本国民高等学校長として活躍していた加藤完治は，ある講演において，「私は丁度二十年前から農村問題に就て種々考え込んで居り」，「十八年前に山形の自治講習所に行つた」，そのときから「真に日本農民の大和魂が鍛練陶冶されますならば，是れ等の問題は自ら解決がつくと斯う信じて専ら日本国民高等学校運動に没頭し，突進して来た」[36] と語っている。成程彼自身の心情や信念においては自治講習所長時代と日本国民高等学校長時代とにおいて一貫しているであろう。とくにかの「大和民族の理想信仰」と「実修の形式」を確立することによって，彼の実践はその自主性，主体性と同時に，形質ともに体系性を確立することができたのではないかと思われる。にもかかわらず，やはりまだ本格的な組織的運動というまでには至っていなかった。むしろ試行錯誤がようやく結実しつつあった時代，あるいは揺籃期乃至準備期ともいうべき時代であったと見られるのである。とはいえこの自治講習所における10年の実践的体験を基礎にしてのみ，次の本格的運動展開へのステップが可能となったのである。

35)　前掲『満洲開拓史』，316頁。

36)　加藤完治著『日本農村教育』東洋図書，昭和九年，259頁。

(2) 運動の組織化と展開――社団法人日本国民高等学校協会の設立と学校の発足

加藤が自治講習所の実績を基礎として友部に日本国民高等学校を開設し，そこで本格的に運動を展開することができたのは，彼を愛し，彼に信頼と期待を寄せていた知友達とりわけ農務官僚石黒忠篤や農学者那須　皓等の利害を越えた協力と尽力によるものであった。そして運動の母体となるべき「日本国民高等学校協会」が，石黒を理事長として組織され，その運動の拠点としての日本国民高等学校が設立され，加藤を校長として開校されたのである。

すでに見てきたように「日本国民高等学校協会」は，その目的を「農村の中堅人物たるべき者の養成指導を為し依つて農民の精神上及物質上の向上発達並農村の改善を期する」こととし，この目的を達成するために「1. 日本国民高等学校を設立し之が経営を為すこと」，「2.　他の国民高等学校の設立を助成すること」，「3.　農村に於ける講習，講話，実務指導を為すこと」などの事業を行うことを定めている。こうして日本国民高等学校運動の態勢は整えられたのである。このような組織的基礎の上に加藤は自らの抱懐する教育理念と計画を具現し，その運動を展開することができたのである。

(3) 日本国民高等学校運動の指導理念

加藤は自分が自治講習所に就任して以来努力してきたのは「農民の魂の奥底に大和民族の理想信仰を確立すること，換言すれば日本農民魂の鍛練陶冶と言ふこと」[37] であったと語っている。果して最初から明確にその認識があったとは思えないが，前稿（広島修大論集第39巻第2号，拙論「Ⅳ. 加藤完治〈上〉）において見てきたように，彼のいう「大和民族の理想信仰」が「実修の形式」をも合わせて発表されたのは雑誌『弥栄』の創刊号

37)　同上。

(1922年2月発刊）であったが，少なくともそれ以前に確立され，あるいは実行に移されていたものと思われるのである。

この「理想信仰」及び「実修の形式」が，加藤の安城農林学校時代から師事し尊敬している筧博士の教説「古神道」論に基づくものであることは，もはや云うまでもない。この「理想信仰」はその後，ある場合には「日本精神」または「日本魂」として説かれているが，それは「何時でも我々は中心点を国に置いて」，「万世一系の天皇の御総攬の下に，常に大日本帝国の弥が上にも益々栄えて行くのに，我々の心身を捧げ尽す，是が即ち日本精神」[38] であるというのである。

そして日本国民高等学校は「農民の子弟にはつきりした人生観，日本人としての理想信仰を明確に自覚させる使命を持つて生れたもの」[39] である。それはまさに「日本農民魂の鍛練陶冶」に他ならない。所謂「実修の形式」はそのための方策である。その名称が示しているように，この形式もまた筧博士の古神道論から示唆されたものである。勿論全く同じではないが，とくに「禊」と「参拝」の儀式的技法は博士の『古神道大義』等に則っていることは明らかである。他に「武道」「読書」及び「事々物々に就きての修業」が置かれている。それらに関しては彼の『日本農村教育』において自ら詳しく解説しているが，ここでは省略することとする。

(4) 「日本的」かつ「農民的」国民高等学校運動

藤井　武によって山形県立自治講習所の設立が構想されたとき，たまたまわが国にデンマーク独特の民衆教育運動が紹介されていた。恐らく恩師矢作栄蔵博士の勧めもあってのことと思われるが，藤井はこれに模して講習所のプランを作成した。その目的とするところは当時の地方改良運動に則して「地方民の堅実なる思想の涵養」と，併せて「行政諸機関の当事者たるべき適材を養成」することにあった。（拙論「Ⅲ．藤井　武」参照）し

38)　同書，105頁。

39)　同書，39頁。

かし，所長として就任した加藤完治は，彼固有の農本主義的思想と古神道信仰とに基づいて，座学よりも労働とくに農業労働を主とする，いわば農民道場的な仕法によって講習生の指導に専念した。そのなかでかの「大和民族の理想信仰」と「実修の形式」を確立し，これがやがて日本国民高等学校運動として展開されたのであった。

こうして日本国民高等学校は「農村青年子女ヲ訓育シテ皇国農民タル信念ヲ涵養セシメ天分ヲ明確ナラシメ其進路ヲ示シ採ルヘキ方針ヲ授ケ以テ農村ノ発達農民文明ノ建設ニ務ムルヲ以テ目的トス」[40] と，その方向を明示したのである。そして入学する生徒はすべて農家の子弟子女とし，それを第一部から第四部までに区分し，それぞれに応じて教育することとしたのである。（ただし例外として第五部の短期講習に関しては学校教員其他青年の受講を認めている）

そこにはこの教育運動が，目的においては「皇国農民」に，そして対象においては「農家の子弟・子女」に限定されているのである。すなわち「日本」とは単なる日本社会あるいは日本国を意味するものではなく，「皇国」すなわち「万世一系の天皇の御総攬の下に」ある「大日本帝国」の謂である。したがって，皇国農民としての信念を確立するためには厳しい「鍛練陶冶」が必要となるのである。この学校が学科の授業のみでなく，むしろそれ以上に農業実習を重んじ，さらに独特の生活指導ともいうべき日課における「実修の形式」を重んじたのはそのためである。加藤がしばしば「理想信仰を植えつける」とか「農民魂をたたき込む」という表現をとるのは，その鍛練主義の表明であろう。

彼は自らの国民高等学校運動を振り返り，「丁抹の国民高等学校にならつたものではありませぬ」とその独自性を強調する一方で，「目的が同じであることゝ，国民高等学校といふのは国際的の意義を持つてゐる所からして，国民高等学校と致しました。」[41] と苦しい弁明をしている。彼は二度の訪欧

40）　同書，303頁。

41）　同書，271頁。

において，この運動の発祥の国デンマークにかなり長く滞在し，その国民高等学校を視察したことはすでに見てきたところである。彼はこの運動の元祖ともいうべきグルントウィやクリステン・コルの思想やその後の運動に学んだところは決して少なくない。しかし彼がどうしても納得いかなかったのは同国の現在の国民高等学校が農民教育や農業教育を中心に据えていなかったことではなかったか。彼がむしろ興味を持ち，それに共感して熱心に語り合ったのは，同国オーデンセの小農学校長ヤコブ・ランゲであった。しかし，元来デンマーク国民高等学校の使命は単に農民教育や農業教育にはなかったのである。その目的と使命はなにか。かつて同国の国民高等学校運動の著名な指導者シュレーデル（Prof. Schroeder）は次のように述べている。

> 「児童に害ふべからざる天賦の特性あるごとく青年には又青年独特の性質あり。此の青年の特質を保護育成し，青年の生活を努めて充実豊富ならしめ兼ねて将来に良果を結ばしめむとするは国民高等学校（Volkshochshule）の職責なり。国民高等学校は青年の人生観確立と職業発見とに力を添へ，青年をして自から其の業に栄ゆると共に，人類の一員として広く社会に貢献せしめむとす」[42]。

国民高等学校はある特定の市民や職業にのみ開放された学校ではなかった。ただし農業国時代の国民高等学校は農民の便宜を考えて農閑期に開校されたのである。その目的はいわゆる精神の覚醒・啓発にあり，ある特定の信仰への教化や特定の職業訓練を目指すものではなかった。この学校がデンマーク特有の「農民文明」を形成したと評されているが，それは結果であって目的ではなかったのである。歴史の教育が重んじられたが，それは当時失われていた国民意識を回復し，かつ青年の魂を刺激し覚醒させるためであって，極端な国家主義的イデオロギーを注入するためではなかっ

42) 那須　皓訳『国民高等学校と農民文明』東文堂，大正二年，1頁。

た。方法的にも厳しい鍛練主義ではなく，いわゆる「生きた言葉」による講義が重んじられたのである。

加藤完治によって展開された日本国民高等学校運動は自らの人生観や進路を自ら選択させ，自主的に確立させようとするものではなかった。日本国民高等学校運動は青年たちに日本農民魂を与え，彼らを勝れた皇国農民たるべく鍛練陶冶することを使命とする教育運動であり，それ以外のものではない。まさに「日本的」であり「農民的」な運動であったのである。それはデンマークのこの運動から見れば，極めて閉鎖的であったと評されるであろう。

(5) 日本国民高等学校運動の社会的・政治的性格

これまで見てきたように，加藤完治を中心的指導者とする日本国民高等学校運動は，その発端は山形県立自治講習所という一地方行政機関内における試行として始まり，やがて独立した社団法人日本国民高等学校協会を母体とする組織的運動として展開された。この運動は従来の農民教育に見られなかった画期的な教育運動であった。その意味では新しい運動であった。しかし，その理念はわが国民の伝統的文化や封建的土地制度や国家体制を革新したり，ましてや革命をもたらそうとするものではかなった。それはまさに日本的そのものともいうべきものであった。したがってこの運動の社会的な機能を特色づけるとすれば，それは保守的，順機能的であり，革新的，逆機能的ではなかったといえるであろう。

また，その協会役員には前稿でみたように，理事長の農林省農務局長石黒忠篤ほか錚々たる官僚や農学者の名が連ねられている。さらに常議員には実業界や農学界の有力者が委嘱されている。これは加藤よりもむしろ石黒の組織力によるものであろうが，この組織をみた限り単なる民間事業とは思えない。それは信頼する加藤に対する応援とともに農林行政事業の一環として支援していることの表明でもある。この運動の本拠としての日本国民高等学校の校地を友部に確保したのも石黒であった。日本国民高等学

校運動は単に加藤の農民愛や理想信仰に基づく民間運動ではなく，むしろ日本の農業・農村・農民政策の一環として積極的に支援された国策的運動でもあったのである。したがって，それはこの時代の日本の政治体制にとっては極めて有益な，まさしく順体制的機能を果した有力な運動であったのである。加藤自身もまた，「大日本帝国の弥が上にも益々栄えて行くのに，我々の心身を捧げ尽す，是が則ち日本精神であります。」と信じていたのである。

加藤の運動はやがて旧満洲国への植民運動にまで展開された。それは彼が「植民は教育の延長」であり「植民問題を離れては，現代の日本に於て教育は徹底出来ない」[43] と信じていたからである。しかもそれが，すでに見てきたように同協会の理事長石黒や理事那須とともに進められたのであった。それはまた日本農民の救済策であり，皇国発展の方策と信じられていたのである。

加藤は『日本農村教育』のなかで，彼がかつて英国や米国を視察したとき「私はつくづく是は地球上に於ける土地の分配が悪い。土地は神が人類に与へられたものである。其土地を独占して居る国があるから，一方に於ては餓えこゞえて居る所の人がある。是はどうしても世界に向つて土地解放の大運動をやらなければならぬ。さう云ふ風な肚が決つた。」[44] と語っている。この欧米訪問の数ヶ月後から彼の朝鮮移民の行動が開始され，やがて満洲移民へと広げられたのであった。この信念に基づいて，そして日本農民救済のために，関東軍の協力を得て進められた満洲移民運動——それは彼の日本国民高等学校運動の延長にほかならなかった——であったとはいえ，やはりそれは他面において関東軍の支援運動であり，国際法的には満洲侵略への協力であった。いうなれば「武装移民乃至自衛移民」，さらに「青少年義勇軍」は，そのための戦力として送られたことになるのである。世は「忠君愛国」の時代であり，日本の行う戦いは「聖戦」とされた時代であった。加藤率いる日本国民高等学校運動もまたその流れから外れることはできなかった。むしろ国民の先頭に立ってそれを促進していったので

ある。

お わ り に

3回にわたって考察を進めてきた加藤完治論をようやく終わることとなった。云うまでもなく，この小論はわが国における国民高等学校運動の生成と展開というテーマに沿って考察論及することを目的としたものである。したがって加藤論に関しても一面的であるという謗りを免れないであろう。ともあれ，これをもって近代日本におけるこの運動の主流をなしていたと見られる潮流の，生成・展開の中心的な役割を果たした人物の系譜を，一応辿ることができたと考えている。この系譜は矢作栄蔵に始まり加藤に終わったが，そのなかの一人藤井　武を除けば，いずれも東大農科大学乃至農学部出身の農学関係者であった。そのことは少なからず日本におけるこの運動の性格と運命を決定づけるものとなったのではなかろうか。ことに上来見てきたように，日本の国民高等学校運動がほとんど農民教育運動と化したのも，そこに一つの原因があるように思われる。しかし，それよりも重要な決定要因は当時の社会的状況就中農村恐慌と農村不況にあったのである。さらにいえば，日本農業・農村の前近代的性格に根本的要因が潜んでいたと云ってよかろう。

そのような基本的諸問題との関わりにおいてこの日本国民高等学校運動も考察される必要があることを痛感する次第である。それはなお筆者にとって残された課題である。

(2000年 3 月30日)

Summary

The Line of the Folk High School Movement in Japan (6)

Tsuyoshi Uno

IV Kanji Katō (Part 3)

Porologue

2. The development of Nihon-kokuminkōtōgakkō-movement.
   (1) The problems and its solving after the starting of Nihon-kokuminkōtōgakkō.
   (2) The development in the early years in the movement.
   (3) The influences on the farmer educational facilities and agricultural schools .
3. The expansion to Manshū-imin (Japanese emigrants to Manshū) movement .
   (1) Set up Nihon-kokuminkōtōgakkō-bunkō (branchschool) in Hōten, and started out the movement toward emigration from Japan to Manshū.
   (2) Manmō-kaitaku-seishōnen-giyūgun (Manmō-cultivation Youth Volunteer).
      ① Training for the trial emigration.
      ② Trial on the training of youth emigration.
      ③ Organizing Manmō-kaitaku-seishōnen-giyūgun.
      ④ Education and Training for them in Uchihara-kunrensho .
4. What was Nihon-kokuminkōtōgakkō-Movement——considering the basic character of this movement.
   (1) When and Where was made it.

(2) Organization and development of movement.

(3) The guideline of movement.

(4) The movement was 'nihonteki' (Japan-nationalistic) and 'nōminteki' (agricultural).

(5) The social and political character of the movement.

Epiloge